

山ノ内 重 広 さ ん （明治42年生）



屈足地帯で、水稻を作付けするために、特に苦心した事柄は、水利を得ることと、強い苗を早く確実に育てることでした。これはもちろん、多収穫を得るためですが、このことを研究しようとするグループが集まって、種々論議の中から、地温を人工的に高めることが出来れば、良い苗を育てられるのではないかとのことになり、それではどうすることが良いか、電気で地温を上げてはとの話になりまして、関係機関と協議の結果、電熱温床を作ろうということになり、深夜電力を利用することを考え、電業の了解を得たり、且つ、屈足市街木工場に夜間作業を止めてもらうための協力を求めたりしたのです。一部協力の得られない所もありましたが、とにかく温床作りの作業に入りました。細かな手違いなどありましたが、成果として、私達の当初の予想をはるかに越えたものでした。会員は喜びましたね。なん度も集まり相談し、あちらこちらの指導を受けたり、お願いに歩いた苦勞が報われたのですから、喜びは一しおでした。この成果を聞いたのであろうか、十勝支庁からの視察、旭川農事試験場の技術者、あるいは、長野県農事試験場より4名の来訪など、個人も多く来訪され対応に自分の仕事はそっちのけの状態でした。その後、皆さんの総意で感謝状を頂いた時は、苦勞を認めてもらえた嬉しさは格別でした。国の政策とはいえ、事実上水田廃止とは残念な思いがします。水田作業には、つきぬ思い出は多いのです。

松 橋 は る の さ ん （明治⁴⁰10年生）

私は佐幌生れです。親は山形県出身です。開拓当時は、家の周りに大木が生えておまして、目通して2~3尺程のものがたくさん見られました。大人が幾日もかかって、切り倒し5~6尺程度玉切りにして、山のように積み上げ秋か春早く燃やすのです。二日も三日も燃えているのです。桂、檜、楓など、今おもっても惜しい大木でしたね。少しでも早く土地を拓くためにはやむを得なかったのですね。私達子供は、枝を集めるとか、子守りなどで、遊ぶ暇などなかったね。楽しく遊べたのは学校にいる時間位でした。あの頃の農家の子供は全部そんな生活であったと思います。

農作業に馬を使うことも少なく、馬耕を出来るようになったのはかなり後になってからです。一鍬一鍬起すのです。手のひらは豆がつぶれて木の皮のように固くなっているのです。これで一人前の開拓者などと話しているのを聞きました。収穫の時期は、天候と勝負しているようなものですからそれは大変なものです。豆類の落し物のときは、むしろを敷いて豆を広げるように置いて、カラ竿を振って一日中働くのです。腕がシビレ、腰はだるくなる、もう無感覚に腕を動かしているようなものです。夕食後一息入れて又頑張るのです。月夜の晩などは、月の光を頼りに夜10時~11時頃まで作業するのです。もう家に入ったら、立っているのもやっという状態なんです。全部始末し終えたら東の空が白ずんでいたという時もあり、又、働いている周りの草に薄く霜が降りていたことなどはしばしばでした。開拓とは努力としんぼうですね。